

ワーズワスとエディンバラ レビュー

— 厳しい鞭

山 田 修 治*

Wordsworth and the *Edinburgh Review*

— His Chief Scourge¹⁾

Shuji Yamada*

Wordsworth の晩年, Lake District に居を移してきた二人の女性がいた。Wordsworth の詩を愛したことが動機だった。一人は Bath から来た Isabella Fenwick だった。Wordsworth 65才。Miss Fenwick 55才頃のことだった。1843年に, 貴重な the I F notes が残った。もう一人は “eccentric” な Harriet Martineau だった。自身作家であり, 広く, 遠く, 旅することを愛し, 又「経済・宗教・税法そして歴史に関して講義もする」(p. 317) 多才ぶりであった。1845年, 彼女が43才の時, Lake District に移って来た。Rydal の家で, Wordsworth の語る言葉に耳傾ける機会の重なったある日, Martineau は, Wordsworth 自身が語った言葉として次のような記述を残している。“It was the reviewers who had prevented him from earning more than £100 a year for a very long period” (p. 319)。後年の Wordsworth のこの述懐を手懸かりに, reviewers が Wordsworth にどう関わったのか, 特に, the *Edinburgh Review* を中心に考えてみる。

I

Lyrical Ballads は1798年9月に出版された。匿名であった。その時 Wordsworth は Coleridge, Dorothy と同道して, すでにドイツへの旅に出てしまっていた。*Lyrical Ballads* は, “the single most influential book of poetry in the history of English Literature” (p. 96) と今日評価されるものであった。特質の1つは, 「理性の時代」を越えようとしたことであった。Pope の確立した詩型や style を踏み越えることであった。社会情勢も, 産業革命, アメリカの独立, フランス革命と, 激しい変化の時代であった。価値感が大きく変っていく時代であった。Wordsworth の試みは, “nature” と “matter-of-fact” を主題に, それを “conversational style and content” (p. 102) で表現しようとするものであった。18世紀の伝統は, “rigid” で, 言葉は “flowery” で, 形式は

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

“strictly metric”で、“heavy classical influence”が支配するものだった。Reviewersは“perfect hexameters or iambic pentameters”をよしと評価していた。Wordsworthはそれに“revolt”する決心であった。(p. 103) この時点までは、Wordsworthの20才代の人生、思想のあらゆる面に、大きく関わったフランス革命の影響が、表立っていた。

一つの提言として、1798年版の*Lyrical Ballads*に、“Advertisement”が付けられた。600語あまりの短いものであった。詩の素材は“are to be found in every subject which can interest the human mind”²⁾ということ。そして、*Lyrical Ballads*に示された詩作品の大多数は“experiments”と考えられるものである。それらの詩は、“how far the language of conversation in the middle and lower classes of society is adapted to the purposes of poetic pleasure” (PW p. 116) であるかを確かめることを、主要な目的として書かれたものである。多くの同時代の作家達の“the gaudiness and inane phraseology” (PW p. 116) に慣れてきた読者は、ここに載せられている詩作品に「奇異」な感じを持つであろう。そうした読者は、これらの詩に“if it contains a natural delineation of human passions, human characters, and human incidents” (PW p. 116) を問い直し、探して欲しい。時として、作者が「下降し過ぎ」、又表現が「俗過ぎる」とし、又“not of sufficient dignity” (PW p. 116) だとして、読者は“the style in which many of these pieces are executed” (PW p. 116) を不可とするかも知れない。しかし、だからといって、即座に、軽卒に、誤った判断を下してしまわないようにして欲しい、といった内容のものであった。

*Lyrical Ballads*は1800年（実際には1801年1月）に2巻本となって新たに再出版された。詩作品も1798年版の23編に比べて、おおよそ3倍になった。いくつかの変化が加えられた。Wordsworth, Coleridge 双方の意向もあり、Wordsworthの名前だけが付けられた。Wordsworthの詩への試みが、長文のPrefaceとして、大胆に、提起された。1802年版では、さらに3000語が加えられた。およそ6000語に及ぶWordsworthの詩論Prefaceは、時代を越えようとする陣痛を受けることになった。

Prefaceに従えば、*Lyrical Ballads*に示された詩作品の主要な目的は、“to choose incidents and situations from common life, and to relate or describe them, throughout, as far as was possible in a selection of language really used by men” (PW p. 123) ということであり、そうした「事件や情況」に“a certain colouring of imagination, whereby ordinary things should be presented to the mind in an unusual aspect” (PW p. 123) を投げかけるということであった。そのために、“Humble and rustic life” (PW p. 123) が選ばれた。そうした環境では、“the essential passions of the heart...are less under restraint, and speak a plainer and more emphatic language” (PW p. 125) と考えられ、“the passions of men are incorporated with the beautiful and permanent forms of nature” (PW p. 125) ということであった。人々は“hourly communicate with the best objects from which the best part of language is originally derived” (PW p. 125) することになり、そしてそうした人々が置かれている「社会階級」からしても“being less under the influence of social vanity, they convey their feelings and notions in simple and unelaborated expressions” (PW p.

125) と考えられた。こういった人達の言葉は, “repeated experience and regular feelings” (PW p. 125) から生起するのであるから, 詩人の言葉より, “a more permanent, and a far more philosophical language” (PW p. 125) なのだ。明らかに新しい “experiment” であった。並々ならぬ決意であったろう。詩人と言えども, 言葉において, きっと “must often, in liveliness and truth, fall short of that which is uttered by men in real life, under the actual pressure of those passions” (PW p. 138) と表明するに至る。詩人は「詩人のためにではなく, 常民のために書くのだ。」(PW p. 143) それ故に, 詩人は「常民のように己を表現しなければならない」(PW p. 143) とあくまで一貫していく。こうした考えを具現する詩作品の題材には, “a forsaken Indian Woman”, “the Female Vagrant”, “the old Huntsman”, “the Idiot Boy”, “the Mad Mother” などがよく扱われた。「貧しい」, 「淋しい」, 「悲しい」, 「不幸」そんな image を読者に与えるものだった。

文体については, まず “personification” をほとんど用いないということであった。その目的は “to imitate, and, as far as possible, to adopt the very language of men” (PW p. 131) ということであり, “I have wished to keep the Reader in the company of flesh and blood” (PW p. 131) ということであった。Wordsworth の視点は, あくまでも「人々の現実の言葉」であり, 「血のかよった人間」であった。“Poetic diction” についても, やはりほとんど用いられないように配慮された。理由は, “personification” の場合と同じとみてよい。Wordsworth の使う言葉を “to bring my language near to the language of men” (PW p. 131) という願いのためだった。こうすることによって, “cut me off from a large portion of phrases and figures of speech which from father to son have long been regarded as the common inheritance of Poets” (PW p. 132) ということになった。しかし Wordsworth は “bad Poets” によって “foolishly repeated” される多くの表現に “feeling of disgust” (PW p. 132) を持ってしまったのだ。

散文の問題についても, 思い切っていた。“Some of the most interesting parts of the best poems will be found to be strictly the language of prose when prose is well written” (PW p. 132) と考え, それを詩作品で証明しようとした。“A large portion of the language of every good poem can in no respect differ from that of good Prose” (PW p. 135) と断言もした。

Wordsworth は, *Lyrical Ballads* に示された詩について, Wordsworth 自身気づいていたいくつかの欠陥についても触れている。自分の連想作用については, “I am sensible that my associations must have sometimes been particular instead of general, and that, consequently, giving to things a false importance” (PW p. 153) であると認めている。“My language may frequently have suffered from those arbitrary connections of feelings and ideas with particular words and phrases” (PW p. 153) ということを危惧している。従って自分にとっては “tender and pathetic” (PW p. 153) なものでも, それが読者にとっては “ludicrous” と感じられることがあるだろう。そして, “Such faulty expressions, were I convinced they were faulty at present, and that they must necessarily continue to be so, I would willingly take all responsible pain to correct” (PW p. 153)。Wordsworth の謙虚さのあらわれである。しかし, “the critic ought never to forget that he

is himself exposed to the same errors as the Poet, and, perhaps, in a much greater degree” (PW p. 153) とは、Wordsworth の秘めた、自負心の強い、挑戦的な性格が感じ取られはしないだろうか。Wordsworth の意気込みでもあった。

Wordsworth は Preface の中で、さらに、当時の英国社会や「文学・劇場芸術」への危惧³⁾、韻文の問題、詩人と科学者⁴⁾、詩人とは何か⁵⁾、詩とは何か⁶⁾、良い詩とは⁷⁾、価値ある詩とは⁸⁾、そして Wordsworth の作詩芸術の鍵⁹⁾に至るまで、綿綿と語り明かしている。ここでは、後に the *Edinburgh Review* から攻撃を受けることになったいくつかの問題のうち、“diction”の問題と“subject-matter”¹⁰⁾の問題を中心に、主たる関係があると思われる部分のいくつかについて確認した。

18世紀に起った“periodical reviewing”¹¹⁾は19世紀の始めにその最盛期を迎えた。その中心となったのが、the *Edinburgh Review* である。18世紀にすでに活躍していた主なものには、the *Monthly Review*, the *Critical Review*, the *British Critic* などがあり、政治色を帯びたものには、the *Antijacobin Review and Magazine* などがあった。雑誌としては、the *Gentleman's Magazine*, the *Monthly Magazine* があった。The *Edinburgh Review* は1802年 Edinburgh の地に産声をあげた。18世紀“Scottish renaissance”をすでに経験し終っていたが、“Athens of the North”として、なお知的、文化的活動の中心地であった。当時 Edinburgh は Tory の治めるところであったが、liberal な、Whiggish な考えをする人達の circle や society も当然あった。そうした場所で、4人の若者が出会うことになった。共に、弁護士あるいは弁護士志願であった。Sydney Smith (31才) が the *Edinburgh Review* の構想を持ち出し、Francis Jeffrey (29才)、Francis Horner (24才)、Henry Brougham (24才) がこれに賛同した。出版者には同年輩の強力な Archibald Constable (後に the *Encyclopaedia Britannica* を出版) が選ばれた。“Economics, politics, science, and literature”¹²⁾を批評対象として出発した。特色は、Monthly としてではなく、当時では唯一の“quarterly review”として出発したことであった。理由は、“not dependent on the earliness of [their] intelligence”¹³⁾ということであった。又、鋭く思い切った批評を保証するため、執筆者の名前は、匿名とした。4名で分担し、持ち寄った29編の reviews は、“the learning of the new Journal, its talent, its spirit, its writing, its independence”¹⁴⁾のすべてにわたって新しく、1802年10月10日に第1号が出されるや、たちまち評判を得た。The *Edinburgh Review* の批評姿勢は“severity”であった。こうして the *Edinburgh Review* は新しい時代を開いていったと同時に、文芸批評だけに限っても、“there were at least sixty other periodicals between 1802 and 1824”¹⁵⁾の中で、“the model of all Reviews of the nineteenth century”¹⁶⁾となった。以来1929年迄存続することになった。The *Edinburgh Review* の第3号が出てから、“sole editor”になった Jeffrey は文学批評のほとんど全てを担当した。Jeffrey の批評論調は、“cannon and mortars”¹⁷⁾と例えられるものであった。

Wordsworth と the *Edinburgh Review* との関りは、1802年10月の the *Edinburgh Review* 第1号で始まった。この号で、Southey の *Thalaba* を批評する場を利用して、Jeffrey はまず自分の neo-classical dogmatism を “Poetry has this much, at least, in common with religion, that its standards

were fixed long ago, by certain inspired writers, whose authority it is no longer lawful to call in question....”¹⁸⁾と示したあとで、Wordsworth や Coleridge 等を “the Lakers” という呼称で呼び、“They constitute, at present, the most formidable conspiracy that has lately been formed against sound judgment in matters poetical....”¹⁹⁾と攻撃の口火を切った。次に対象を Wordsworth 個人に向け、この “conspiracy” を具体的に Wordsworth の “diction”, “subject-matter”, “social attitudes” の3点に絞って、批評を加えている。“Diction” に対する Jeffrey の Wordsworth への攻撃は、“the bold use of those rude and negligent expressions”²⁰⁾が問題なのだとし、又 Preface の中で、Wordsworth が自分が詩作品に使う言葉は、“the language of the lower classes” なのだと明言していることにも不満の攻撃を加えている。²¹⁾

Lyrical Ballads が出版されたのは1798年、第二版が出たのは1800年、そしてこの時、the *Edinburgh Review* はまだ存在していなかった。しかし、後に the *Edinburgh Review* を創刊することになった4名は、当時、決して大き過ぎることはなかった literary circle での *Lyrical Ballads* の評判について、無知であろうはずがなかった。1800年の Preface、1802年の Preface についての反応がこうした形の批評となってあらわれたわけである。いくつか、別のこと²²⁾を除いては、大筋ではここまでであり、あとは、“they took the opportunity to have a side-swipe at Wordsworth, and especially his Preface,” (p. 128) という態度をとった。Southey はまだ Lake District に移っていなかったし、Coleridge はここで多くの詩を書いたわけでもなかった。それに詩風についてもいろいろ相違点を持った Southey, Coleridge, Wordsworth ではあったが、この時から、ひと school にして the *Edinburgh Review* によって、始めて “the Lake Poets” という呼称で呼ばれることになった。Wordsworth の Preface に対して the *Edinburgh Review* が持った印象は、これは “conceit” (p. 125) だということであった。

Lyrical Ballads は1798年にまず500部が出版されたが、その大多数が売れ残ってしまい、Wordsworth や Coleridge と親交のあった出版元の Cottle は一時破産。いくつか出た批評もよくなかった。しかし、出版1年後の1799年秋頃 the *British Critic* をはじめ、よい批評が出始めた。それと同時に、売れ行きも伸びはじめ、版權を継いだ Longman は、1800年に750部、さらに新しい詩を加えた2巻本の new edition を1000部出した。当時の出版部数からすれば、この数も少ないものであったが、the *Monthly Review* や、特に the *British Critic* から長文の好意的な批評が出るにおよび、1802年、1805年と版を重ねるほどになった。しかし、*Lyrical Ballads* の詩作品の評判と、Preface に対する批評とは、一致しなかった。

Preface を *Lyrical Ballads* に付けることについては、Wordsworth と Coleridge の間に相違があった。しかし、新たに出版された *Lyrical Ballads* には、Preface が付けられた。Wordsworth は “he was foolhardy enough to try to dictate what was and what was not poetry,” (p. 126) という行動を取った。この試みは、19世紀始めの多くの文学青年等から、“Wordsworth’s analysis, in his Preface, was the highest of pretension and conceit” (p. 126) と考えられてしまった。今日の立場から考えれば、死後出版された *The Prelude* などの分析研究からしても、Wordsworth は “was in

many ways a hundred years ahead of his time—as he was in his self-analysis in *The Prelude*, which in many of its childhood insights pre-dated Freud” (p. 126) と評価を与えられるものであった。近年アメリカの大学では, “the study of ‘creative writing’, and all the analysis that goes with it, is seen as a serious and proper subject,” (p. 126) ということが現状である。しかし, 現実には, 当時, Preface については, Wordsworth に “many unnecessary enemies” (p. 126) をつくらせ, “did him, and his poems, more harm than good” (p. 125) という結果を招くことになった。Byron は Wordsworth を “an idiot” と皮肉っぽく決めつけた。Preface の批評は “presumptuous”, “vitriol”, “pretension” といった言葉で表現されることがあった。

II

1802年, Annette の問題に区切りをつけた Wordsworth は, 同じ年 Mary と結婚。1803年に Scotland 旅行。この旅で, Wordsworth と Dorothy は同道した Coleridge と途中から別行動を取る結果になってしまった。1804年1月 Coleridge は Lake District を去り, 1806年再び Grasmere に戻るまで Malta へ。1805年弟 John の死。見えはじめた詩力の衰え。表立ってきた “reactionary” の問題。Wordsworth にとっては多事であった。

詩作品に関しては, *Lyrical Ballads* の2巻本を出して以来, 出版は全く止っていた。7年間にわたっていた。評判を得た *Lyrical Ballads*, それに反し問題を深く後に残してしまった Preface。Wordsworth の次の出版を待つ人達は多かった。出版者達や, Wordsworth の詩作品を楽しみにする人達。しかし, 手厳しく攻撃を加えるため, 待機していた批評家も多かった。Preface は多くの敵を作ってしまったのだ。Wordsworth はそうした literary circle の実状を, 充分には, 察知していなかったのかも知れない。大哲学詩 *The Recluse* を念頭に, 詩作に没頭した貴重な年月であった。1800年の当初は, Wordsworth にとって, 詩人として, 極めて, 実り多い時期であった。*The Prelude* は1805年に書き上げられていた。出版は死後と決められていた。‘The solitary Reaper’, ‘I wondered lonely as a cloud’, ‘To the Daisy’, ‘Resolution and Independence’, ‘She was a Phantom of Delight’, ‘Elegiac Stanzas’, ‘Among all Lovely Things’, ‘Ode to Duty’, ‘The World is too much with me’, the sonnet on ‘Westminster Bridge’, そして ‘My heart leaps up’, もこの Wordsworth 最盛期の作品であった。Wordsworth の評価を決めるような詩が書かれていった。1807年の夏, Wordsworth はこうした作品の中から, 長さ, 内容, 形式のそれぞれ異なった作品113編を選び, the *Poems in Two Volumes* として出版した。*Lyrical Ballads* の ‘Tintern Abbey’ に呼応するかのように, ‘Ode: Intimations of Immortality’ が詩集の最後に置かれた。

いくつかの批評が出された。待っていたと言わぬばかりであった。1年間で10編程が出そろった。 “Each one more or less slammed him” (p. 189) という結果が生じた。一般読者の反応も, 大方は “followed or even anticipated the reviews” ²³⁾ ということになった。*Monthly Literary Recreations* からは Byron の筆によるものが出た。Byron は “the greatest Wordsworth-hater of his age”

(p. 189) だった。結果は明白であった。かつてのWordsworthには不似合な“patriotic”な詩に焦点を当てての批評であった。The *Critical Review* からは意に反する結果が出てしまった。Wordsworthは良い批評・良い売れ行きを期待し、1807年7月12日にFrancis Wranghamに手紙を書き、the *Critical Review* の評者にWranghamの影響が及ぶようにと望みをかけたのだが、意通じずして、結果は裏目になってしまった。

The *Edinburgh Review* から批評が出たのは、Volume XI. October 1807, においてであった。すでに評判となっていた *Lyrical Ballads* への言及にはじまり、長文のものであった。要約に従えば、

Jeffrey said that *Lyrical Ballads* had been deservedly popular, but the new poems were childish, tedious, miserable, disgusting, absurd; Wordsworth was obviously raving and many lines simply made no sense; the new school was perverse and in bad taste, and must be killed off at once before it gained any more ground. Jeffrey went so far as to hope that these new volumes would not sell—in fact, he was convinced they would never sell—and he finished by looking ‘for a verdict against publication’. (pp. 190-1)

というものであった。猛烈な批評であったと言うべきであろうか。まさに“attack”であった。Jeffreyは評中“low, silly and uninteresting”とWordsworthの“subjects”に対して、再度不満を示した。‘Ode; Intimations of Immortality’に対してさえも、“This is, beyond all doubt, the most illegible and unintelligible part of the publication”²⁴⁾といった批評であった。Jeffreyが評価したのはsonnetだけであった。Wordsworthは、“presumptuous”と大方から判断されたPrefaceの問題があったのだから、多少の覚悟はあったのかも知れないが、それにしても、“The worst, most extensive and most damaging” (p. 190) な批評であった。

Wordsworthは批評を全て読んだわけではないと言った。中には人から話し聞かされたものもあった。Wordsworthは批評を“stoical”に受け止めた。少なくとも表面的にはそうであった。“The London wits and witlings were too busy running around from rout to rout in the senseless hurry of their idle lives to have any time for love or reverence. The critics and the public would have to be educated” (p. 191) とWordsworthは言葉を残した。内心、Wordsworthは深く傷ついていた。すでに書き上げられていた *The White Doe of Rylstone* の出版を取り止めた。LondonにいたColeridgeの助けを得て、出版者との交渉は出版の方向に向っていた。Coleridgeの説得も効果はなかった。家族の増加により、不便の多くなったDove Cottageから、大きい、新しい、近くのAllan Bankへの引越しを控え、お金は特に必要であった。現実的になったDorothyの、願いを込めた勧めにも、Wordsworthは決心を変えようとしなかった。間もなく完成できるところまで書き進めていた *The Excursion* の出版も、Wordsworthは取り止める決心をした。

Wordsworthが次の詩集を出版するまでに再度7年が必要となった。その間、散文を書くこともあった。Coleridgeが *Friend* の計画を持ったことがあり、それを手助けすることも理由の一つであった。詩才に衰えが目立つようになっていた。批評の矢面に立たされることを避けること

もあったと思われる。Dorothy は Wordsworth が散文を書くことによって、貴重な詩才を消耗させていくことに、当然賛成できなかった。1810年10月には、Coleridge と一緒に London に向う途中の Basil Montagu が、Wordsworth が君のことを、今では “an ‘absolute nuisance in the family’” だ、 “‘rotted drunkard’ who had ‘rotted his entrails out by intemperance’” (p. 205) だ、と言っていたよというようなことを、舌足らずに、ふと話した言葉が発端となり、それまでの経緯もあり、以後二人の関係は取り返ししのつかない状態になってしまった。不幸な悲しい出来事が重なっていった。Wordsworth の暮し向きは、経済的にほとんどいつも貧しかった。この時期、Lord Lonsdale や Daniel Stuart に手紙を書くこともあった。Lord Lonsdale からは、年 £ 100 が送られる計画が進んだ。Wordsworth が Lord Lonsdale の力添えによって、Westmorland の Distributor of Stamps の職を得たのは、1813年3月のことであった。これは政府の仕事であった。公務員になることであった。しかもこの地位は地方の有力者の口添えによって得られるものであった。若い日の Wordsworth を知る者にとっては驚きであった。“London wits” は “William had sold himself to the government and had become a Lowther lackey——a social crime for which some of them never forgave him” (p. 219) と反応した。

友人達が期待する中、*The Excursion* が出版されたのは1814年6月だった。ほぼ20年間あたためつけられた Wordsworth 最長の作品であり、哲学詩 *The Recluse* のあとにつけられるべき作品であった。Lord Lonsdale に献じられた。Wordsworth は出版に先立ち、London の友人であり詩人であった Samuel Rogers に私信を送ることがあった。5月5日であった。

I am about to print——(do not start!) eight thousand lines, which is but a small portion of what I shall oppress the world with, if strength and life do not fail me. I shall be content if the Publication pays its expenses, for Mr. Scott and your friend Lord Byron flourishing at the rate they do, how can an honest *Poet* hope to thrive?

Wordsworth の真意が何であったのか。こうしたことを書き示すことによって、何が期待できたのか。心情は理解できるにしても、“arrogant”, “self-important” との批評は避けがたいものであった。Wordsworth の性格に起因するものでもあっただろう。

1809年 the *Edinburgh Review* に対向する意味で創刊された保守的な the *Quarterly Review* 等に見られたように、Wordsworth 批評に少し変化が出はじめた時期にもかかわらず、the *Edinburgh Review*. Volume 24. November, 1814, の論調は一向に変化のきざしがなかった。再度長文にわたった批評は、いきなり “This will never do” で始まった。“Yet there is occasionally very considerable force of writing and tenderness of sentiment in this part of the work” とか “some brilliant and forcible expressions here and there” と幾分は認めるものの、

It is longer, weaker, and tamer, than any of Mr. Wordsworth's other productions; with less boldness of originality, and less even of that extreme simplicity and lowliness of tone which wavered so prettily, in the *Lyrical Ballads*, between silliness and pathos.

と批評はつづき、

The case of Mr. Wordsworth, we perceive, is now manifestly hopeless; and we gave him up as altogether incurable, and beyond the power of criticism...after all the admonitions he has received, cannot possibly be expected to 'change his hand, or check his pride,' upon the suggestion of far weightier monitors than we can pretend to be... Long habits of seclusion, and an excessive ambition of originality, can alone account for the disproportion which seems to exist between the author's taste and his genius;

とその論調は、やはり「攻撃」を思わせるものであった。理由がなかったわけではない。Jeffrey 以外にも好批評を書かなかった批評家達は、作品が形の上で “cumbrous” で、内容が “ditactic” で “moralizing” で、文体は “little better than prose” であり、「この作品は大作のほんの一部にしか過ぎない」などと公言するのは “arrogance” だと決めつけたのだった。²⁵⁾

The Excursion は確かに多くの欠点を持った作品だったかも知れない。長々と繰り返しの多いことも気になる所であった。しかし、Wordsworth が作品の中で扱っている人間は、“*The Excursion*,...is the poetic character of the poor, the ignorant, and the underprivileged in a way that no English poem has been before and since” ²⁶⁾ ということである。貴重なことであった。しかし、Jeffrey はこの点に関しても、先の *The Excursion* に関する *the Edinburgh Review* の中で、“...Why should Mr. Wordsworth have made his hero a superannuated Pedlar?” と理解を示さない。むしろ “it dealt with mean and low-born persons and their affairs that could not possibly be fit subjects for poetry” ²⁷⁾ と冷笑さえするのだった。

The Excursion は売れ行きの面でも悲観的であった。Wordsworth は随分努力をした。買ってもらえそうな裕福な友人に手紙を書いたり、Charles Lloyd のような人に本を贈呈したりもした。(p. 241) ほぼ8ヶ月後初版500部のうち300部が売れただけだった。厳しい批評と値段の高さが影響した。出版社の Longman は、作品が極めて長編であること、best-seller にはなりそうもないこと等を理由に、豪華な quarto で 2 guinea の値段をつけた。当時 best-seller だった Scott や Byron の本が一冊おおよそ 2 ~ 3 shillings だった。

The Edinburgh Review の批評に対して、つまり Jeffrey の攻撃に対して、Wordsworth は、今度は、“If the mind were under the power of the will I should read Mr. Jeffrey merely to expose his stupidity to his still more stupid admirers. This not being the case, I shall not pollute my fingers with touching his book” ²⁸⁾ と言葉を返した。感情の発露を言葉にしたのだ。しかし、もっと驚くべきことは、1814年12月15日のJames Hogg から Southey 宛の手紙で示された事実であった。

“I supped with him (Jeffrey) last night, but there was so many people that I got but little conversation with him, but what we had was solely about you and Wordsworth. I suppose you have heard what a crushing review he has given the latter. I still found him persisting

in his first asseveration, that it was heavy; but what was my pleasure to find that he had only got to the seventeenth division. I assured him that he had the marrow of the thing to come at as yet, and in that I was joined by Mr. Alinson."

Jeffrey は *The Excursion* を全て読んでしまわないうちにすでにあの批評を書いてしまっていたのだ。1814年12月31日の Mrs. Clarkson への手紙で、Wordsworth は

I smiled at your notion of Coleridge reviewing the Ex(cursion) in the Ed(inburgh).³⁰⁾ I much doubt whether he has read three pages of the poem, and Jeff(rey)³¹⁾ has already printed off a Review; beginning with these elegant and decisive words; 'This will not do'. The sage Critic then proceeding to show cause why. This precious piece is what the Coxcomb's Idolaters call a *crushing* Review.

Coleridge は *The Excursion* には失望したことを Wordsworth に1815年5月30日の手紙で直接告げるのだが、こうした Jeffrey の *The Excursion* への攻撃には立腹し、後に *Biographia Literaria* を書き、Wordsworth を評価することになった。

良きにつけ悪しきにつけ Wordsworth は北国の人の特性を持っていた。強い性格で自分を支え、自分に対する "posterity" の評価を信じた。それを頼りに耐えた。批評には超越しているような態度を見せた。批評を積極的に読むこともしなかった。乱されまい、負けまいとした。しかし、重なる批評、攻撃には、ひどく悲しみ失意したことは当然であった。Wordsworth は、*A Letter to a Friend of Robert Burns* の一件で、Jeffrey を Napoleon や Robespierre にたとえ、"the leading spirit was the same in them all"³²⁾ と嫌った。Wordsworth はかつて公然と批評家に対抗することはなかった。Wordsworth は Jeffrey を中心とした批評家からの厳しい攻撃とは別に、友人からは励ましを受けることができた。自らへの励みとした。批評家というのは、つぎのような者だった。

They are altogether incompetent judges. These people in the senseless hurry of their idle lives do not *read* books, they merely snatch a glance at them that they may talk about them. And even if this were not so, never forget what I believe was observed to you by Coleridge, that every great and original writer, in proportion as he is great or original, must himself create the taste by which he is to be relished; he must teach the art by which he is to be seen; this, in a certain degree, even to all persons, however wise and pure may be their lives, and however unvitiated their taste; but for those who dip into books in order to give an opinion of them, or talk about them to take up an opinion—for this multitude of unhappy, and misguided, and misguiding beings, an entire regeneration must be produced; and if this be possible, it must be a work of *time*.³³⁾

翌年の1815年には、二つの詩集が出版された。一つは *The Collected Poems* で、*Lyrical Ballads* 中の作品やその他の作品を 'Poems of Childhood' とか 'Poems of the Imagination' といったよう

にして区分けし、再編したものであった。新しい詩もいくつか加えられた。Dorothy の詩を 3 編加えたことは新鮮であった。最大の注目は Wordsworth が又新しい preface を付けたことであった。彼はその中で、先の攻撃から自分と自分の詩を弁護しようとしたことと、‘fancy’ と ‘imagination’ について自分なりの定義を長々と加えたことであった。(p. 240) *The Monthly Review* はこの preface は “humility” と “clarity” に欠けるものと批評し、*the Quarterly Review* との合同批評で、William Lyall は「良く書かれているが、必ずしも常識的だとは言えない」、と Wordsworth の “belligerence” を非難した。

5 月には Wordsworth の自信と期待の作品 *The White Doe of Rylstone* が、いよいよ出版された。Wordsworth は自作品のうち最も良く書けた作品の一つだと期待した。挿絵は Sir George Beaumont のものであった。Edinburgh で印刷され、Longman から a slim quarto で出版された。妻 Mary に献じられたものであった。*The Edinburgh Review* は、Volume 25. October, 1815, on *The White Doe* で、“This, we think, has the merit of being the very worst poem we ever saw imprinted in a quarto volume....” と批評した。1 guinea の値段も影響したのだろう。本の売れ行きは期待に添わなかった。Dorothy は悲しんだが、もう売れ行きのことで心痛めるのは止そうと心を決めた。

For I now perceive clearly that till my dear Brother is laid in his grave his writings will not produce any profit. This I now care no more about and shall never more trouble my head concerning the sale of them. I once thought *The White Doe* might have helped off the other, but I now perceive it can hardly help itself. It is a pity it was published in so expensive a form because some are thereby deprived of the pleasure of reading it; but however cheap his poems might be I am sure it will be very long before they have an extensive sale—nay it will not be while he is alive to know it.... His writings will live—will comfort the afflicted and animate the happy to purer happiness when we and our little cares are all forgotten.³⁴⁾

The Edinburgh Review から出た “the very worst...” という批評にもかかわらず、丁度、此頃から、Wordsworth 評価に変化の兆し、が見え始めた。*The Quarterly Review* は “respectful” であったし、*The Monthly Review* は「非難」することは止め、*the Gentleman's Magazine* は “in a high rank among the living Poets of his country” に、Wordsworth を位置付けるのだった。*The Eclectic Review* は “appreciative” だと評価し、*Blackwood's Magazine* ははじめて Wordsworth を “a Master as well as a Poet” として扱った。³⁵⁾ 1816 年 *the Eclectic Review* は Wordsworth を Southey と一緒に “two greatest living poets” と評価し、Wordsworth に関しては、さらに “didactic” な面はやはり批判しつつも、その人間の “heart” への迫り方には、卓越したものがある、と賞讃した。(p. 274)

こうした評価の変化がどのような理由によるかを確定することは難しい問題であるが、考えられることは、1816 年の Napoleon の失脚以降、個人への攻撃、中傷、時には感情が表面に出過ぎた、

政治的にも急進的な評論が時代をリードした「ジャーナリズムの情勢は、政治の時代ではなく、文学の時代へと様変りを見せ」³⁶⁾始めていたことであった。Wordsworth は己を曲げず、己の信ずる所を、執拗なまでに次のように堅持した。“Before the public, resolutely going his own way, sticking to his poetic last and not being deflected, he had taught readers the taste by which his poetry should be appreciated” (p. 277)。そして “there had been a lot that they had enjoyed and benefited from,” (p. 277) と人々は理解し始めたのだった。

1817年になると、賞讃、批判を織り交ぜて、Coleridge は *Biographia Literaria* で Wordsworth を助けた。そのことは、“It was not until his *Biographia Literaria* appeared that Wordsworth was understood”³⁷⁾と言われる程に、Wordsworth にとっては意義の大きいものとなった。当時 Coleridge は Wordsworth の “blind admirer” ではなくなっていたので、Wordsworth の詩の問題点に対する指摘も明確であった。それらは Moorman の表現を借りれば、“his ‘inconstancy of style’...between the baldest matter-of-fact simplicity and the profoundest grandeur; his insistence on minute and particular details of place, position, and appearance,...and a tendency to ‘thoughts and images too great for the subject’”³⁸⁾ということに絞られるものであった。Coleridge は Wordsworth が詩作品に期待するような評価が得られないのは、*Lyrical Ballads* に付けられた Preface に対する “the unexampled opposition” にその本当の起因があるのだと指摘した。³⁹⁾そして想像力という点においては、Wordsworth は “stands nearest of all modern writers to Shakespeare and Milton”⁴⁰⁾と高い評価を与えた。

1818年になると *Lectures on the English Poets* が出版された。Hazlitt はその中で Wordsworth を “the most original poet now living...” と讃えた。持前の鋭い批評で Wordsworth の欠点にも触れながら、Wordsworth は “Lake School” の leader として、French Revolution に鼓舞され、English poetry を救済するに最も力あった者とした。(p. 278) そして Lake Poets の果した功績をこう評価した。

“Poetical literature had, towards the close of the last century, degenerated into the most trite, insipid and mechanical of all things in the hands of the followers of Pope. It wanted something to stir it up. The Deucalions who were to perform this feat of regeneration were the present Poet-Laureate and the two authors of *Lyrical Ballads*.” (p. 278)

この間、Wordsworth は詩集を出版していなかった。詩作もめっきり少なくなってしまうていた。Rydal Mount で、Wordsworth は “one of his fallow periods, preoccupied with politics,⁴¹⁾ travelling or family affairs” (p. 263) を経験していた。

1819年4月、ほぼ20年前に完成していた作品が出版された。1815年に計画を持ったのだが、悪評つづきで、おそらく中断されたのだと思われる。この *Peter Bell* 出版には良い事が起った。初版の500部が二週間で売りつくされてしまった。こんなことは今迄に経験し得ないことであった。

“William had the last laugh” (p. 276) ということになった。批評には失望を隠さないものや厳

しいものもあったが、多くは Wordsworth を “a great poet” だと認め、*Peter Bell* を “a major work from a major poet” (p. 276) と評した。出版の計画があった時、Reynolds, Shelley, Byron によって parody 化されたり、satire にされたり、Keats によって匿名の批評が書かれたりしたのだが、*the Eclectic Review* は Wordsworth を “a poet, after all, cannot be laughed down” (p. 276) と認めた。Beaumont の挿絵が入り、Southey に献じられたものだった。そして翌年、*The River Duddon* が出版された時、賞讃され、Wordsworth の評価は広く受け入れられ、文学的名声は確立された。Wordsworth 50才の時であった。Duddon 河は、Wordsworth が Hawkshead 時代に初めて訪れた河である。Lake District 屈指の美しい谷間を流れるこの河は、少年の日以来、Wordsworth の心を捕え、離れることがなかった。33編からなる *The River Duddon* の sonnet 集は、その時 Cambridge University, Trinity College の Master であった末弟 Christopher Wordsworth に献じられた。*Blackwood Magazine* はこう評した。“The Duddon poems showed there had been ‘total failure of all attempts which have been made to check the fame of Wordsworth.’” (p. 278) 先の *Peter Bell* とこの *The River Duddon* とに対して、*the Edinburgh Review* からは批評が出されなかった。

1820年、大陸旅行の帰路、Paris で Annette と Caroline に会った後、London を経て Cambridge に向い、Christopher に会ったことが一つの起因となって、一連の sonnet が書きつづけられることになった。Wordsworth は the church of England の歴史を詩に綴り、1822年 *The Ecclesiastical Sketches* として公にした。Wordsworth の sonnet は既に評判を得たものであった。*The Edinburgh Review* もかつて sonnet だけは誉めたことがあった。批評家達は好意を持ってこの出版を迎え評した。ほぼ6年間、沈黙を守りつづけた *the Edinburgh Review* は、November, 1822. Volume XXXVIII で、過去にも遡り、*Peter Bell*, *Waggoner*, *The River Duddon*, *Ecclesiastical Sketches* そして *Memorials of a Tour* にも及んで批評した。1813年 Wordsworth が the Distributor of Stamps for Westmorland になったことにも言及された。

The contact of the Stamp-office appears to have had nearly as bad an effect on Mr. Wordsworth. His *Peter Bell* and his *Waggoner* put his admirers, we believe, a little to their shifts; but since he has openly taken to the office of a publican, and exchanged the company of leechgatherers for that of tax-gatherers, he has fallen into a way of writing which is equally distasteful to his old friends and his old monitors—a sort of prosy, solemn, obscure, feeble kind of mouthing,—sadly garnished with shreds of phrases from Milton and the Bible—but without nature and without passion,—and with a plentiful lack of meaning, compensated only by a large allowance of affectation and egotism. This is the taste in which a volume of *Sonnets to the River Duddon* is composed and another which he calls *Ecclesiastical Sketches*, and these precious *Memorials of a Tour*. The great characteristic of these works is a sort of emphatic inanity—a singular barrenness and feebleness of thought, disguised under a sententious and assuming manner and a style beyond example verbose and obscure. Most of the little pieces of which they are composed begin with the promise of some strik-

ing image or deep reflection; but end, almost invariably, in disappointment——having, most commonly, no perceptible meaning at all——or one incredibly puerile and poor——and exemplifying nothing but the very worthless art of saying ordinary things in an unintelligible way——and hiding no meaning in a kind of stern and pompous wordiness.

論調は少しも変わっていなかった。厳しいものであった。Wordsworth の詩作は極めて稀になっていた。1830年の始めまで新しい詩集は一冊も出版されることはなかった。過去の作品を改訂したり、new edition にして出したりすることが新しい仕事になっていた。The *Edinburgh Review* や Jeffrey との問題は、従って、区切りとなっていた。The *Recluse* も進まなかった。

III

ほぼ20年間に渡って、the *Edinburgh Review* が Wordsworth を批評、攻撃しつづけた起因は、Coleridge も指摘したように、Preface にあった。“Diction”の問題、“subject-matter”の問題であった。そしてもう一つ、the *Edinburgh Review* が Wordsworth 批評・攻撃の的にしつづけた、Wordsworth の“social attitudes”の問題も、深く根強いものがあつた。The *Edinburgh Review* は Whiggish な考え方をする批評誌であつた。若き日には、“republican”であり、“radical”であつた Wordsworth は、フランス革命後、年月を重ねるに従って、Tory へと“reactionary”な姿勢を強めていった。このことは、the *Edinburgh Review* が Wordsworth の“politics”を、不信を持って、「真底から憎み軽蔑した」(p. 279)としても理のあることであつた。

Wordsworth の“reactionary”な面が最初に形を取って現われたのは、*Lyrical Ballads* の2巻本を出した時であつた。詩人 Wordsworth への力添えになろうと決めた Coleridge の知恵のもとに、Wordsworth は Charles James Fox 等の有力者に、贈呈本を贈ったのだつた。媚びるような気持を込めて、署名を付した手紙を添えて贈ったものだつた。詩人として生きる者が、自分の作品が、より多く、より広く行き渡り、より多く売れることを願うのは、自然なことであつた。しかし、10年前には“the young rebel who went his own way, who hated the wealthy and powerful (especially aristocrats and politicians), who had actively refused all help, all contacts with people who might do him some good” (p. 127)であつた Wordsworth には、思いがけない行動であつた。大きな変化であつた。この出版の成功への希求の強さでもあつた。“He was older now, approaching thirty-one, either wiser or perhaps more worldly” (p. 127)ということでもあつたのだろうか。

詩作に耽り、年を重ねるにつれ Wordsworth の“reactionary”な態度・行動は定まっていた。取り巻く環境もそれに呼応していった。1805年、弟 John の海難事故死は、Wordsworth には特に掛替えのない弟であり、悲しい出来事となつた。Wordsworth に一層道徳的に生きる決心をさせることになつた。Wordsworth の人生態度は“becoming almost a puritan” (p. 174)といったものになっていた。Coleridge が Malta に去つた後、Lake District での Wordsworth は、交遊す

る仲間も、既に radicalist の熱情も消えた Southey や、Sir George Beaumont, Humphrey Davy そして Walter Scott など、総じて安定した Tory 的発想の持ち主達であった。自分のことを“recluse”と呼ぶこともあった。経済的に切迫していた時、the Distributor of Stamps の職を得たことは喜びであった。しかしこの職業を得る経緯、性格から、反面多くの反感を招くことになった。Shelley は Wordsworth を“a rebel from the cause of liberty”⁴²⁾だと非難した。Jeffrey は“blinded by the possession of a sinecure place” (p. 279) と責めた。しかし、Wordsworth は増々保守的になり、patriotic になっていった。自分の義務は“to support the Tories, the Established Church and the Landed Gentry” (p. 228) だと素直に信じた。Wordsworth は自分自身の変化を理解していなかった。自分は、基本的には、変化していないと信じていた。自分は変わることなく国家の自立と民主主義を愛する者だと思っていた。フランスへの“turncoat”を非難されれば、今も“tyranny”を憎むことに変わりはなく、Napoleon には賛意を示し得ず、いつも自由を愛する者だと答えた。Wordsworth の考え方からは、かつての激しさは影を薄め、“moderation”を良しとする姿勢が支配的になっていた。時代を大きく変えるような力には消極的になっていた。“Fear”を持つことさえあった。

Wordsworth は変っていった。それは Wordsworth の生きた時代を象徴するかのようでもあった。産業革命、フランス革命、そして railways と変化は止まることがなかった。価値観は目まぐるしく揺れた。英国史の中でも、最も“drastic”な変化を示した時期の一つであった。社会が揺れ、人心も揺れた。批難を浴びながら、詩人や作家達も、考え行動するところを変更していくことがあった。「政治的軌道修正」,「信条の変化」,はWordsworth 一人の問題ではなかった。かつて“Pantisocracy”の実現をアメリカの地に求め、revolution に熱血を沸かした Coleridge にも Southey にも、それはあてはまることではなかったか。Wordsworth と生年を同じくする Beethoven にもそれはあった。Southey は開き直った。“No more ‘ashamed of having been a republican than of having been a boy.’” (p. 268) と。時代の流れであった、と言うことは許されないだろうか。

Wordsworth には強い性格があった。60才を過ぎても、1日20 miles 以上歩こうと努力できる体にも恵まれた。(p. 289) “Moralistic, strong and determined in mind and body” (p. 208) という特性を持っていた。“Profounder and more ascetic solemnity” (p. 208) という徳性を備えていた。“Passionate”, “stern”, “industrious” そして時に応じて、日常とは異って、“social” にもなれる性格を持っていた。土地の人達からは“eccentric”だと思われる所もあった。“Arrogance”を批難もされた。“Alleged egotism”, “arrogant egotism” が邪魔をすることもあった。De Quincey は“Wordsworth was not aware of the irritation and disgust which he had founded in the minds of his friends” (p. 226) と自分の立場からだけの Wordsworth 描写を行なった。Coleridge は“hypochondria”ではないかと疑ったことがあった。Peter Bell を出版しようと計画した時には、Keats は“perverse”だと Wordsworth の性格を形容した。Lyrical Ballads から、与えられるものの多かった“The Romantic Poets”も、Wordsworth の“pompous”で“didactic”なところには

素直になれなかった。Wordsworth には性格に強さがあった。

Wordsworth に対し、the *Edinburgh Review* は Wordsworth の politics・reactionary を “hate” し “despise” するという批評・攻撃発想を、いくつか考えられたものの一つとして持った。しかし、Jeffrey 自身は、それだけではなく、さらに別の視点を持って、Wordsworth 批評・攻撃を繰り返した。真意は別の処にもあった。Jeffrey の〈願い〉はこうである。

Jeffrey denied that his criticism had been inspired by politics and personalities. He just wanted to keep Wordsworth in his place, to counter the worship of his admirers and help him to rid himself of his faults and excesses. (p. 279)

IV

Wordsworth には自分に課した使命があった。“A chosen Son”⁴³⁾であるとの自覚。“A dedicated Spirit”⁴⁴⁾にならなければならないという “vows” そして “bond”。“The poet’s soul was with me at that time, / Sweet meditations, the still overflow / Of happiness and truth”⁴⁵⁾ という Cambridge 時代。自分自身を “only as a poet” (p. 262) として見つめ, “live and work only as a poet” (p. 281) という自分への “vow” を貫いた生涯。

Coleridge は Wordsworth が真実の哲学詩を書くことを期待し、勧めた。Shorter poems を書きつづけるのではなく、一大哲学詩 *The Recluse* を完成するように励まし、願った。Coleridge は West Country で Wordsworth と友情を暖め、詩想を持ち合った頃、Wordsworth を讃え、やがて *Lyrical Ballads* の 2 巻本が出版される運びになっていく時、Wordsworth の “public relations” の役割をするのだと決心したことがあった。⁴⁶⁾ 批判者、嘲笑者、そして諸々の攻撃から Wordsworth を守り、Wordsworth の詩を正しく人々に理解させようと力を貸した。いつまでも Wordsworth が “subject-matter” として “lower classes” の人々を扱うことに反対し、そうした主題からはやく離れることを願った。⁴⁷⁾ 1803 年の Scotland 旅行での出来事があった後しばらくして、Coleridge が Lake District を去る意向のあることを知った時、Wordsworth は 1799 年、寒い冬、ドイツの Goslar で筆を起こした *The Prelude* の完成を急いだ。そして Coleridge に捧げた。

後年 Wordsworth が詩を書くこともほとんどなくなってしまう、詩力も衰えてしまった時点でも、Dorothy も Mary も、Wordsworth が *The Recluse* を完成することを尚期待し、応援しつづけた。*The Excursion* の完成を見たものの、*The Recluse* は遂に未完であった。

Wordsworth の生活は遺縁りを必要とする連続であった。Southey も De Quincey も、Wordsworth は Mary, Dorothy, Sarah, そして自分自身の恵まれた健康と、まれに見る程 “lucky” だと思った。Coleridge も自分の結婚・家庭生活に引き比べ、Wordsworth の家庭を羨しいと思うことがあった。思いがけない Calvert からの遺産、Lord Lonsdale, Sir George Beaumont 等からの重なる助けと励ましは確かに “lucky” であったが、しかし、Wordsworth はいつも貧しかった。

例えば1808年を例にした Wordsworth の家族及び同居人構成はこうであった。William, Mary, 4 人の子供達 (John, Dora, Thomas, Catherine), Dorothy, Sarah (Mary の妹), Coleridge, 彼の 2 人の息子 (Derwent, Hartley, 週末にやってきた), Mrs. Coleridge と娘の Sara (時々来て一週間位滞在), 2 人の servants⁴⁸⁾であった。10人を越えているのは普通の状態であった。Wordsworth が生涯にわたって持った職業は Stamp Distributor の職だけであった。Wordsworth の最初の詩集出版になった1793年の *An Evening Walk, Descriptive Sketches* に始まり, *Lyrical Ballads* そしてその後と Wordsworth は “never wrote for immediate fame, though he might have written for immediate money” (p. 128) というのであった。1808年の *the Poems in Two Volumes* も Dove Cottage が家族の増加で手狭になり, 大きな Allan Bank の家に引越す必要に迫られ, まとまったお金の必要な時期であった。満を持して, 期待を込めての出版は既に触れてきた通りである。最初の詩集出版以来1812年までのほぼ20年間で, Wordsworth が詩集から得た収入は £ 140であった。当時 best-seller だった Scott は言うに及ばず, 身近かにいた Southey と比較してみても, それがいかに少額なものであったかがわかる。1817年頃を例にすると Southey の年間約 £ 2000に対して, Wordsworth は約 £ 20であった。Wordsworth は勿論, 質素・儉約であった。“A man of Letters...ought to be severely frugal”⁴⁹⁾ という考えは, Wordsworth の “doctrine” であった。Wordsworth の用意できたお金と Mary の相続遺産そして Lord Lonsdale の助けを合わせて, 1806年 Ullswater を見下す Patterdale の土地を手に入れ得たことは, 例外的な出来事であった。何度も繰り返えされた転居も, 良い住いであったが, 常に借家住いの一生であった。“Plain living and high thinking” はそのまま現実であった。人からのアドバイスを得て, £ 500の鉄道株を手にしたのは, 評価の定まった1825年のことであった。

Wordsworth は1812年の始め, 経済状態が極めて厳しかった時, Lord Lonsdale に何か力添えを得られるようなことはないかどうかとの手紙を書いたことがあった。February 6th 1812の日付けのものであった。その中で, 文学は自分が生涯に渡って求めて止まないものであるが, いろいろ事情があって, お金にはなかなかかなりにくい。自分の書く詩は時代の趣味に合わない。かといって, 今評判を得ている詩人・作家達と喜んで心から交際する気にもなれない, と言ったことを伝えたことがあった。手紙に対する具体的な返信が得られなかった時, 暗い気持がさらに高じて, London の友人で *the Courier* の編集をしていた Daniel Stuart に職の斡旋を願う手紙を書いた。1812年秋の頃になっていた。

Now you know I live chiefly in a retired corner of the world, and therefore there is no chance that I should hear of anything suitable, likely to become vacant, except through the superior information of my Friends. Nor is there anyone to whom I can apply with greater probability of receiving the requisite knowledge than to yourself.—Will you then be so kind as to point out to me anything which is likely to answer my purpose that may come to your knowledge.—Of course all this is *between ourselves*. I have no objection, I must add, to quit this part of the Country, provided the salary be adequate, and the duty what I am

equal to, without being under the necessity of withdrawing myself wholly from Literature,”
50)

差し迫った決意であった。Wordsworth は Lake District を去ることを覚悟する程であった。Dorothy も “Living with a genius didn't pay the rent” (p. 243) と悟り、15 August 1815の Mrs. Catherine Clarkson への手紙で、“We shall never grow rich” と覚悟を決めるのだった。Wordsworth は、実は、自分の詩集の売れ行きの悪いこと、読者の好みを握み、応じる希望もないこと等々、重なることが多く、もう出版することは止め、“retire” (p. 242) しようと、真剣に考えつづけた。

Wordsworth には the *Edinburgh Review* からの被害意識があった。H. C. Robinson は、May 13th, 1812, の日記にそれを書き留めた。“Wordsworth always thought that he was robbed of just fame, and, consequently, of his just emolument by the *Edinburgh Review*”⁵¹⁾ と印された。The *Edinburgh Review* によって “This will never do” と攻撃された *The Excursion* は、25年後には、詩の読者からほとんど “Bible” のように愛読されるようになり、“W. 's concern with the spiritual dignity of the poor earned him an honorary degree at Oxford.”⁵²⁾ 1839年のことであった。その前年 Wordsworth は the new University of Durham から既に “honorary degree” を与えられていた。*The Excursion* は、読者に、“not only his compassion for sufferers, but that ‘delicacy towards aberrations from the strict path’”⁵³⁾ を感じ取らせてくれると評価されたのだ。Wordsworth は “pleads for, and in the persons of the Wanderer and the Pastor offers, forbearance, and forgiveness with its concomitant, hope”⁵⁴⁾ と理解されたのだ。De Quincey は Wordsworth の名声の過程を、1820年迄は “was trampled underfoot”, そして1820年から1830年の10年間は “militant” であったと表現した。(p. 279) 1830年代の Wordsworth の出版の売れ行きは、生涯最良のものであった。1843年 Southey の死。Wordsworth は、辞退しつつも、同年 Poet Laureate に。1850年死と共に、かねて計画の通り Mary の手によって *The Prelude* の出版。Tennyson の時代の後、1879年 Matthew Arnold の撰による ‘Golden Treasury’ series の the Best of Wordsworth が評判を得て best-seller になった。(p. 342) “Creed” が薄れ、“religious doubts” に揺れ動く時代の中で、Wordsworth は Arnold によって Shakespeare, Milton につぐ詩人として再評価された。1897年、フランスの学者 Emile Legouis は *The Prelude* の研究を終え、この作品の重要性と、Wordsworth とを評価した。Wordsworth はかつて14 February 1815の R. P. Gillies への手紙で、Jeffrey のことを “the greatest Dunce, I believe, in this Island,” と呼んだことがあった。その Jeffrey は、1829年 Scotland の弁護団の Dean になった。と同時に、the *Edinburgh Review* の editor を辞した。翌1830年 Jeffrey は Court of Session (民事控訴院) の Lord Advocate (検事総長) の地位についた。最高位であった。同じ年 “Lord” の敬称が与えられた。

事実は不可解であった。Robinson は November 14th, 1810の日記で、

“Saw Coleridge for the first time.... He related to us that Jeffrey, the Editor of the *Edin-*

burgh Review had lately called on him and assured him that he was a great admirer of Wordsworth's poetry, that his *Lyrical Ballads* were always on his table; that he (Wordsworth) had been attacked in the *Review* only because the Errors of Men and Genius ought to be exposed.⁵⁵⁾

と Jeffrey が公にはしなかった別の面の貴重な記録を残している。Robinson は又 October 25th, 1814, の日記で, Jeffrey が望んだ意外な言動を記録している。

....Dined with Mr. Tillbrook of Peterhouse. He is an admirer of Wordsworth. He says that Wilson,⁵⁶⁾ the poet, assured him that Jeffrey, the *Edinburgh Review*, declared to him that he is a great admirer of Wordsworth; and that he had attacked him, not because he himself thinks lowly of him, but because the public think highly of him.... Jeffrey further asked Wilson to introduce him to Wordsworth, which Wilson refused doing.⁵⁷⁾

Wordsworth を案ずる Southey は, December 24th, 1814, の Scott 宛の手紙で, Jeffrey が *The Excursion* について所謂 “crushing review” をしたことに言及し, “I heartily wish Wordsworth may one day meet with him, and lay him alongside, yard-arm and yard-arm in argument.”⁵⁸⁾ と二人の関係に道の開かれることを願った。しかし, 二人はお互いに会うことはなかった。Wordsworth は Jeffrey の review を積極的に読むということもなかった。Gillies への, Friday [Sept.] 19th 1817 の手紙で,

I have not read Mr. Coleridge's 'Biographia', having contented myself with skimming parts of it; so that you will not be surprised when I tell you that I shall never read a syllable of Mr. Jefferson⁵⁹⁾ Critique. Indeed I am heartily sick of even the criticism, of course cannot humor an inclination to turn to the worst——”

Francis Jeffrey は William Wordsworth にとって厳しい “chief scourge” となった。Francis Jeffrey はそれを望んだのだった。

[注]

- 1) Davies, Hunter: *William Wordsworth a Biography*, London, Weidenfeld and Nicolson, 1980, p. 279. このテキストからの引用はこれ以後は (p. 279) と略して示す。
- 2) Owen, W. J. B. and Smyser, Jane Worthington (ed.): *The Prose Works of William Wordsworth Volume I*, Oxford, 1974, p. 116. このテキストからの引用はこれ以後は (PW p. 116) と略して示す。
- 3) a multitude of causes, unknown to former times, are now acting with a combined force to blunt the discriminating powers of the mind, and, unfitting it for all voluntary exertion, to reduce it to a state of almost savage torpor.... To this tendency of life and manners the literature and theatrical exhibitions of the country have conformed themselves. The invaluable works of our elder writers, I had almost said the works of Shakespeare and Milton, are driven into neglect by frantic novels, sickly and stupid German Tragedies, and deluges of idle and extravagant stories in verse. (PW p. 129)

- 4) The knowledge both of the poet and the Man of Science is pleasure....The Man of science seeks truth as a remote and unknown benefactor; he cherishes and loves it in his solitude: the Poet singing a song in which all human beings join with him, rejoices in the presence of truth as our visible friend and hourly companion. Poetry is the breath and finer spirit of all knowledge; it is the impassioned expression which is in the countenance of all Science. (PW pp. 140-1)
- 5) He is a man speaking to men.... (PW p. 138) The Poet writes under one restriction only, namely, the necessity of giving immediate pleasure to human Being.... (PW p. 139) He is a rock of defence for human nature.... (PW p. 140)
- 6) Poetry sheds no tears 'such as Angels weep,' but natural and human tears.... (PW p. 135) Poetry is the image of man and nature.... (PW p. 139)...man and nature as essentially adapted to each other, and the mind of man as naturally the mirror of the fairest and most interesting properties of nature. (PW p. 140)
- 7) all good poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings.... (PW p. 126)
- 8) Poems to which any value can be attached, were never produced on any variety of subjects but by a man who being possessed of more than usual organic sensibility had also thought long and deeply. (PW p. 126)
- 9) poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till, by a species of re-action, the tranquillity gradually disappears, and an emotion, kindred to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind. In this mood successful composition generally begins, and in a mood similar to this it is carried on.... (PW p. 149)
- 10) Hayden, John O.: *The Romantic Reviewers 1802-1824*, London, Routledge & Kegan Paul, 1969, p. 79.
このテキストからの引用はこれ以後 (RR p. 79) と略して示す。
- 11) RR p. 1
- 12) *Ibid.*, p. 9
- 13) *Ibid.*, p. 11
- 14) *Ibid.*, p. 10
- 15) *Ibid.*, p. 1
- 16) *Ibid.*, p. 8
- 17) *Ibid.*, p. 14
- 18) *The Edinburgh Review, Volume I, October, 1802*, p. 63
- 19) *Ibid.*, p. 64.
- 20) *Ibid.*, p. 65.
- 21) *Ibid.*, p. 66.
- 22) たとえば lower classes についての考え方の違い: Jeffrey and Wordsworth are talking about two different types of lower classes. To Jeffrey, the vulgar are represented by 'a clown, a tradesman or a market-wench,'... the shepherd-farmers of Cumberland and Westmorland, of whom Wordsworth was talking.... (RR p. 80)
- 23) Moorman, Mary: *William Wordsworth a Biography The Later Years 1803-1850*, Oxford, 1965, p. 101.
これ以後 Moorman と略して示す。
- 24) *The Edinburgh Review, Volume X I, October, 1807*.
- 25) Smith, Elsie: *An Estimate of William Wordsworth by his Contemporaries 1793-1822*, New York, Haskell House, 1966, p. 172. これ以後 EWW と略して示す。
- 26) Moorman, p. 182.

- 27) *Ibid.*, pp. 182-3.
- 28) *Ibid.*, p. 261.
- 29) () 内は筆者の加筆。
- 30) 上に同じ。
- 31) 上に同じ。
- 32) Moorman, p. 298.
- 33) Selincourt, Ernest de (ed.) and Moorman, Mary (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth II. The Middle Years Part 1 1806-1811*. Second Edition, Oxford, 1969, p. 150.
- 34) *Ibid.*, p. 247.
- 35) *EWV*, pp. 225-6.
- 36) イギリス・ロマン派学会編, イギリス・ロマン派研究——思想・人・作品, 桐原書店, 1985: 出口保夫, ロマン派の歴史的位相と文芸ジャーナリズム, p. 30.
- 37) *EWV*, p. 42.
- 38) Moorman, p. 311.
- 39) Coleridge, S. T.: *Biographia Literaria, Volume I*, Shawcross J. (ed.), Oxford, 1965, p. 51.
- 40) *EWV*, p. 270.
- 41) 1818年に Westmorland の election があり, Wordsworth は Dorothy と the Earl of Lonsdale の立候補していた二人の息子を応援した。その選挙で, the *Edinburgh Review* の founders の一人 Henry Brougham も立候補しており, 相対抗した。
- 42) *EWV*. p. 124.
- 43) Wordsworth : *The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (Text of 1805), Selincourt, Ernest de (ed.), Oxford, 1966, Book III, l. 82.
- 44) *Ibid.*, Book IV, l. 344.
- 45) *Ibid.*, Book VI, ll. 55-7.
- 46) As early as September, 1800, he determined to perform this office for his friend. He began to realize that *Christabel* would not be finished in time for the second edition of the *Lyrical Ballads*, and writing to a friend, probably Humphry Davy, he says: "I abandon poetry altogether. I leave the higher and deeper kinds to Wordsworth, the delightful, popular and simply dignified to Southey, and reserve for myself the honourable attempt to make others feel and understand their writings, as they deserve to be felt." This intention was not fulfilled until Jeffrey's attack on the *Excursion* had fired Coleridge's anger. (*EWV*. p. 42)
- 47) On November 15th, 1810, の日記の中で, H. C. Robinson は "...Coleridge spoke in warm praise of Wordsworth, but blamed him for attaching himself to the low in his desire to avoid the artificial in genteel life." と書き留めている。*EWV*, pp. 124-5.
- 48) servant には寝食が与えられ, それ以外には, 一年一人につき £ 2 位が与えられた。
- 49) Selincourt, Ernest de (ed.) and Moorman, Mary (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth II. The Middle Years Part 1 1806-1811*. Second Edition, Oxford, 1967, p. 76.
- 50) Selincourt, Ernest de (ed.) and Moorman, Mary and Hill, Alan G. (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth III. The Middle Years Part 2 1812-1820*. Second Edition, Oxford, 1970, p. 48.
- 51) *EWV*, p. 126.
- 52) Moorman, p. 183.
- 53) *Ibid.*, p. 183.
- 54) *Ibid.*, p. 183.

- 55) EWW, p. 124.
- 56) 17才の Glasgow University の学生だった時, Wordsworth の *Lyrical Ballads* に感激し, Wordsworth に fan letter を書いた。Wordsworth も2500語にも及ぶ長い返信を書き, 個別の作品や詩一般について Wilson に語った。後に Wilson は Lake District に Wordsworth をしたってやってきた。Lake Poets の一人に数えられるようになった。Wilson と Jeffrey は友人同志であった。
- 57) EWW, p. 156.
- 58) *Ibid.*, p. 173.
- 59) Wordsworth means 'Mr. Jeffrey's'.

参考文献

- Davies, Hunter: *William Wordsworth a Biography*, London, 1980.
- Owen, W. J. B. and Smyser, Jane Worthington (ed.): *The Prose Works of William Wordsworth Volume I*, Oxford, 1974.
- Hayden, John Q.: *The Romantic Reviewers 1802—1824*, London, 1969.
- Moorman, Mary: *William Wordsworth a Biography The Later Years 1803—1850*, Oxford, 1965.
- Smith, Elsie: *An Estimate of William Wordsworth by his Contemporaries 1793 — 1822*, New York, 1966.
- Selincourt, Ernest de (ed.) and Moorman, Mary (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth II. The Middle Years Part 1 1806—1811*. Second Edition, Oxford, 1969.
- Selincourt, Ernest de (ed.) and Moorman, Mary and Hill, Alan G. (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth III. The Middle Years Part 2 1812—1820*. Second Edition, Oxford, 1970.
- Selincourt, Ernest de (ed.) and Shaver, Chester L. (revised): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth The Early Years 1787—1805*. Second Edition, Oxford, 1967.
- イギリス・ロマン派学会編：イギリス・ロマン派研究——思想・人・作品，桐原書店，1985.
- Coleridge, S. T.: *Biographia Literaria, Volume I, II*, Shawcross J. (ed.), Oxford, 1965.
- Wordsworth: *The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (Text of 1805), Selincourt, Ernest de (ed.), Oxford, 1966.
- Selincourt, Ernest de and Darbishire, Helen (ed.): *The Poetical Works of William Wordsworth Five Volumes*, Oxford, 1967.
- Wordsworth and Coleridge: *The Lyrical Ballads 1798—1805*, with an Introduction and Notes by George Sampson, London, 1965.